

# SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

## グランドツアー (Grand Tour)

2024年 / ポルトガル・イタリア・フランス・ドイツ・日本・中国映画  
配給：ミモザフィルムズ / 129分

2025 (令和7) 年 10月 20日 鑑賞

テアトル梅田

Data

2025-97

監督：ミゲル・ゴメス

脚本：マリアナ・リカルド、テルモ・  
シューロ、モーレン・ファゼ  
ンデイロ、ミゲル・ゴメス

出演：ゴンサロ・ワディントン / ク  
リスティーナ・アルファイア  
テ / クラウディオ・ダ・シル  
ヴァ / ランケータ・トラン /  
ジョルジュ・アンドラーデ /  
ジョアン・ペドロ・ヴァス /  
ジョアン・ペドロ・ベernal  
/ テレーザ・マドルーガ

## 👁️👁️ みどころ

ジュール・ヴェルヌの小説『八十日間世界一周』は後期ビクトリア王朝時代の波乱万丈の物語だが、15～17世紀の“大航海時代”を主導したのはポルトガル。そんなポルトガルの巨匠ミゲル・ゴメス監督が企画した『グランドツアー』は、規模こそ『八十日間世界一周』に劣るものの、その奇想天外さ（ハチャメチャさ）と楽しさは想像をはるかに絶するものだ。

エドワードのグランドツアーの目的は「婚約者から逃げたい!」、モリーのそれは「婚約者に追いつきたい」だが、そこまですれ違う2人が、なぜこんな奇跡のグランドツアーを実現?

時は1918年。本来は第1次世界大戦終了直後の混乱期だが、なぜエドワードの日本へのグランドツアーでは、なぜ北新地のうどん屋「つるつる庵」が登場するの? さらに、彼が虚無僧の一団に紛れて逃げ込んだ先は? また、上海から長江を遡り、重慶、成都に至る船旅は、賈樟柯（ジャ・ジャンクー）監督の「長江モノ」でおなじみだが、巨大な三峡ダム建設は1980～2000年の出来事ではないの?

『八十日間世界一周』はハッピーエンドで終わったが、エドワードとモリーのグランドツアーの成れの果ては? ハチャメチャな映画だが、私はこんなハチャメチャさが大好き。ポルトガルの巨匠ミゲル・ゴメス監督に大拍手!

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■□「グランドツアー」の発想は、さすがポルトガル! ■□

今でこそポルトガルはヨーロッパの二流国、三流国に成り下がっているが、ヴァスコ・ダ・ガマやコロンブス、マゼラン等々を輩出した15～17世紀の大航海時代のポルトガルとスペインは、世界一、二の超大国だった。そして、「グランドツアー」と題された本作は、

2024年のカンヌ国際映画祭で監督賞を受賞した名作だが、その監督はポルトガルの巨匠ミゲル・ゴメス監督だ。

「グランドツアー」とは単なる「大きな旅行」という意味ではなく、本作のパンフレットにある住吉智恵（アートプロデューサー／RealTokyo ディレクター）氏の「時空を超えてパラレルに並走する、境界の曖昧な世界線」によれば、「もともと17世紀から19世紀にかけて、英国の上流階級の子弟が教育の仕上げとして古代ギリシャ・ローマの遺跡や古典芸術を鑑賞し、見聞を広めるための長期旅行を指していた。やがて欧米列強国の植民地政策を経て、20世紀初頭には『グランドツアー』の目的地は世界に拡大し、英国領インドから極東にかけて周遊するアジアの旅が流行するようになる。」と書かれている。そうすると、本作は19世紀のジュール・ヴェルヌの『八十日間世界一周』と同じように、一人の勇気ある男による一大冒険記？

いやいや、さにあらず。ミゲル・ゴメス監督が自分の結婚式の前夜にサマセット・モームの旅行記『パーラーの紳士』に着想を得て監督した本作は、何とも奇想天外かつハチャメチャに面白い映画だから、それに注目！さすが、ポルトガル！なるほど今でもポルトガル人たるミゲル・ゴメス監督は「グランドツアー」の発想を！？

## ■□■時代は1918年、ビルマのラングーンでのハプニングは？■□■

結婚式は女性にとってはもちろん、男性にとっても人生の一大事。日本では個人の結びつき以上に家と家との結びつきが重視されているから、余計に結婚式は一大事だ。それは第1次世界大戦が終了した直後の1918年当時のイギリスでも同じはずだが、本作冒頭はビルマのラングーンに住む大英帝国の公務員エドワード（ゴンサロ・ワディントン）が、ロンドンから船の長旅を経て到着する婚約者モリー（クリスティーナ・アルファイアテ）を迎え、結婚式に向かうことになっているにもかかわらず、容易にそれに踏み切れない優柔不断なエドワードの姿を描き出していく。そんなエドワードは、あるうことか、モリーが港に降り立つ直前に、思い余ってシンガポール行きの船に飛び乗ってしまったから、ビックリ！

私は去る10/3～13まで、ジャパネット主催の豪華クルーズ船、MSC ベリシモによる日本一周9泊10日の旅に出かけたが、それは当然自ら希望してのものだ。しかし、エドワードがビルマのラングーンからシンガポール行きの船に飛び乗った目的はただ一つ、婚約者のモリーから逃げるためだったから、アレレ、アレレ・・・。そりゃ一体なぜ？普通なら、そんな異常事態の勃発によって婚約は解消され、結婚式も吹っ飛んでしまうはずだが、本作はさにあらず。そんな導入部に続いて、追っかけてくる婚約者モリーを振り切り、アジアを股にかけて逃げ回る（グランドツアーする）エドワードの姿が描かれるので、それに注目！

## ■□■まずは監督自身がグランドツアーを体験！■□■

「百聞は一見に如かず」は大切な視点だが、世の中なかなかそうはいかないのが現実だ。

ところが、文豪サマセット・モームが1930年に発表したグランドツアーの象徴的作品といえる『パーラーの紳士』からインスピレーションを得て本作の製作に着手したポルトガルの巨匠ミゲル・ゴメス監督は、まずは“グランドツアー”の実践として、自らラングーン／シンガポール／バンコク／サイゴン／マニラ／大阪／上海／重慶を巡るグランドツアーを体験した後に、本作の脚本に着手したというからすごい。本作はそれだけ入念なりサーチに裏付けられているわけだ。ちなみに、映画に登場するシンガポールのラッフルズ・ホテルは、モームが愛した常宿としても知られているようだ。

## ■□■流れ流れてビルマ→シンガポール→タイ→ベトナム！■□■

かつて巷には竹越ひろ子や渡哲也が歌った『東京流れ者』（65年）なる曲が流行ったが、それはタイトルどおり、あくまで（狭い）東京の中を流れ流れて歩く、やくざ者の生きざまを歌ったものだった。それに比べれば、本作に見る“グランドツアー”の規模はメチャ大きい上、そのスピードもメチャ速い。

1918年当時の船の旅や列車の旅を考えれば、いくら金を払っても、①ビルマ（のラングーン）からシンガポールへの船旅も、②シンガポールからタイ（のバンコク）への陸路の旅も、そりゃ大変だ。もっとも、シンガポールでエドワードが高級ホテル・ラッフルズで泊まれたのは幸運だったが、そのバーでは、あろうことか、モリーの従兄、レジナルド（ジョルジュ・アンドラーデ）が「シンガポール・スリング」なるカクテルを飲んでいたのでビックリ！「俺の従妹といつ結婚するつもりだ？」等の会話の中、コンシェルジュがやって来て「そちらに着く。Mより」との電報が渡されたからエドワードはビックリ！そこで、エドワードは、バンコク行きの列車に飛び乗ることに・・・。

旅行中の事故はつきものだが、エドワードが乗ったシンガポールからタイのバンコク行きの列車の脱輪、転倒はいただけない。そんな“ハプニング”に遭遇すれば、いくらモリーから逃げたい一心であっても、エドワードの“グランドツアー”はこれにてジ・エンド！？私は一瞬そう思ったが、何の何の！密林の中を歩いて進み、小さな村に出たエドワードは、そこでガイドを雇い、ポニーで③タイのバンコクに向かったからすごい。さらにエドワードは、バンコクから漁船に乗ってフランス領の④ベトナムのサイゴンに向かうことに。これは何ともすごいものだ。彼のこんな“グランドツアー”のエネルギーは、一体どこから湧いてくるの？

## ■□■更に、フィリピン→日本→上海へ！■□■

本作は2部制になっており、前半はエドワードの視点から、後半はモリーの視点からの“グランドツアー”が綴られる。しかし、それがわかるのはずっと後になってからだ。したがって、導入部から前半におけるエドワードの「グランドツアー」＝「1人旅（モリーからの逃避行）」は、どんな形でいつまで続くのか、観客はサッパリわからないまま続いていくが、何しろその展開がメチャ面白いから、全体の構成のことなどを完全に忘れてスクリーンに見入ってしまうはずだ。

モリーがどんな手段でエドワードを追跡しているのかは全くわからないが、サイゴンで体調を崩したエドワードの元に、「サイゴン到着。M」との電報が届いたからすごい。病気から回復し、⑤フィリピンのマニラに移動したエドワードは、そこで酒やギャンブルに浸るように2週間を過ごすことに。

そして新年、アメリカの水兵と知り合ったエドワードは、彼らの軍艦に乗り込み、今度フィリピンのマニラから⑥大阪に渡ったが、そこでは私もよく知っている大阪・北新地のうどん屋「つるつる庵」が印象的な場面で登場してきたからビックリ！アレレ、エドワードの旅（グランドツアー）は1918年のことではなかったの！？

外国人監督が描く日本の姿はいかにもステレオタイプで奇妙なものが多いが、ポルトガルの巨匠ミゲル・ゴメス監督は、なぜあえて大阪のうどん店「つるつる庵」を取り上げたの？日本を舞台にしたハリウッド映画では、マイケル・ダグラスと高倉健が共演したりドリー・スコット監督の『ブラック・レイン』（89年）が有名だが、そこで描かれた大阪の町には奇妙な魅力があった。

それはともかく、本作では大阪でトラブルに巻き込まれそうになったエドワードが、今度は知り合いになった虚無僧の団にまぎれ込んで、ある山の寺に向かうことに……。なるほど、なるほど。ところが、そこにエドワードをスパイと疑った憲兵たちと西洋人の女がやってきたから大変だ。疑惑は晴れたものの、「明日、上海行きの船に乗れ」と国外退去を命じられたため、何とエドワードは今度は日本から⑦上海へ渡ること。

## ■□■長江を上海から重慶、成都へ！本作は賈樟柯監督作品！？■□■

私は2000年8月の大連旅行、2001年8月の西安・敦煌旅行をはじめとして、約20回の中国旅行を体験している。その中で最も“お手軽”かつ“お値打ち”な旅が大阪→上海→杭州→大阪の3泊4日程度のツアーだ。それに対して、「行きたいけれども、なかなか行けない」のが、長江を上海から遡り、成都、重慶に向かう船旅だ。中国は広いけれども、飛行機に乗れば西安でも敦煌でも、また雲南省でも、場合によっては新疆ウイグルでもひとつ飛び、しかし、長江を遡る船旅となると、それなりの日数を要するのは仕方ない。

もともと、エドワードは時間を気にしながら世界を飛び回るエリートビジネスマンではなく、単に婚約者モリーの追っかけから逃げているだけの男だから、「今日が長江を遡る船のラスト。明日からは船は動かない。」と聞けば、もっつけの幸いだ。もともと、日本からやっと上海に着いたにもかかわらず、エドワードがすぐに長江を遡る船に乗ったのは、上海に着くとそこに「到着する。すごく会いたい。M」と書かれた電報が届いていたためだった。しかし、一体なぜモリーは、ここまで早くエドワードの後を追ってることができるの？

長江を遡る旅といえば、中国第5世代を代表する賈樟柯（ジャ・ジャンクー）監督が生涯をかけて描いてきたテーマであり、長江の三峡ダム建設に伴う都市の盛衰とそれに絡まる人間模様が興味深い、アレレ、それは1918年当時の話ではなく、1970～2000年代に

かけての話のはずだ。長江を遡る船旅では、「三国志」で有名な「白帝城」が見モノだが、さて重慶で船を降りて車夫を雇い、山に向かったエドワードを待ち受けていた運命とは？

## ■□■エドワードのグランドツアーのなれの果ては？■□■

エドワードのアジアを中心としたグランドツアーは、「80 日間世界一周」には遠く及ばないものの、その行程はすごい。

ミゲル・ゴメス監督は、一方で1918年という時代設定を明示しながら、他方で勝手にこれを無視し、日本では何と北新地のうどん屋「つるつる庵」を登場させるなど、ハチャメチャな撮影とハチャメチャな演出を断行し、それを次々とスクリーン上に映し出していく。またドキュメンタリー風の解説が、日本の旅では日本語で、中国の上海、重慶、成都の旅では中国語で流れてくるのも極めて異例だ。ビルマやシンガポール、そしてタイやベトナムで見る風景や、そこでの夜の舞台に登場するさまざまな人形芝居は一体いつの時代のものなの？

成都は「三国志」という歴史の世界ではもとより、日本ではパンダの生まれ故郷として有名だが、エドワードが重慶で雇った車夫たちが、ある夜、彼の荷物を盗んで消えてしまったから、さあ大変！着の身着のままとなったエドワードは、“成都の領事”という男に助けられたが、そんな怪しげな男に「僕は臆病者だ」「婚約者は世界一頑固な女だ」と愚痴をこぼしながら竹林の中に横たわったエドワードは、無念にも……？

『八十日間世界一周』では主人公のフィリアス・フォッグに素晴らしい結末が待っていたが、エドワードの「グランドツアー」のなれの果ては……？

## ■□■第2部に見る、モリーのグランドツアーは？■□■

前述したとおり、エドワードの「グランドツアー」は壮大なもの。それを図示すれば次頁のとおりだが、いくら「婚約者を追いかける！」という執念を燃やしていたとしても、女の身1つでその後を追いかけるのは至難の技だ。しかし、本作ではエドワードがアジアの各地を点々とする毎に、モリーから「到着する！」旨の電報が届いていたからすごい。一体モリーはどうやって、そんなモリーのグランドツアーを実現したの？

本作では、エドワード亡き後(?)の第2部で、モリーのグランドツアーが、⑤フィリピンと⑥日本を除いて、そっくりそのまま再現していくので、その姿にも注目！もっとも、第2部では、新たにモリーに一目惚れし、「俺と結婚してくれ」と迫る男サンダース(クラウディオ・ダ・シルヴァ)や、サイゴンにあるサンダースの別荘で療養するモリーを優しく看病する美しい地元の娘ゴック(ラン＝ケー・トラン)が登場するので、そのキャラとその役割にも注目！

上海から長江を遡り重慶に至る船旅の最終便にエドワードが乗ってしまえば、次回の船は4ヶ月後にしか出ないから、これにてモリーの追跡劇もジ・エンド！一瞬そう思われたが、モリーは小舟を調達し、危険を顧みずゴックと共に上流へ向かったからすごい。さらに、嵐に見舞われ、乗員たちは行方不明になったものの、川に落ちたモリーをゴックが助



け、2人はなんとか村へたどり着いたから、さらにすごい。そしてそこでモリーが出会ったのは、処刑を待つ4人の盗賊たちだ。彼らは“ある西洋人”に盗みを働いた後にその西洋人を殺した罪で囚われていたが、その西洋人とは一体ダレ？

そんな何とも不可思議な運命の中、村を出て歩き続けるモリーも疲れ果て催眠状態となり、やがて竹林の中に、エドワードと同じように横たわることに・・・。

2025 (令和7) 年10月27日記